夏の月夜に

紅い鳥居を屏風して
辨天前のねむの木が
化粧してゐる月様を
そつと抱へて眠つてる。

櫻草

隣のお庭の片隅に
白いお顔に紅付けて
だまつて咲いた櫻草
誰に見せよと咲いたのか
お前の姿は淋しいよ。

戀の花

深い谷間に入つてゝ
だまつてゐたらどうしても
山彦なれば應(こた)えない

けれ共聲を出したなら
必ず似たよな聲があり
戀の花だつて咲くものに。

島の小鳥

人が笑へばオームも笑ふ
わたしや小鳥の身じやすもの
いつも雨ふる此の島で
聲を嗄らして啼くけれど
海をへだつたあなたには
ちつとも聞えてくれぬだろ。

憧憬

お〻見えないものよ
お〻音せぬものよ
君はいつも私を嬉ばせた
其處に憧憬が生ずるから。

幼き祈

十五篇

金時飴

他の子供がよくたべる
金時飴が欲しくつて
母の財布の中にある
たつた二文を盗んだら
一日飯も食はせない
母の心がにくかつた。

川狩

子供時代は仕事はいやで
川狩りするのが好きだつた
いつであつたか忘れたが
こんなことから遂々に
晩の御飯も止められた。

花えらび

黄色、紫さては白
桃や緋色のある中で
どれでもいいのをあげやうと
云はれて見たが何んとやら
子供心に羞かしく
一番詰らぬ花とつて
そつとかくれて泣きました。

嫁突

『さあ嫁突きじや嫁突じや』
子供はどんどと入つたら
三太のお嫁は羞しがつて
顔を眞紅に染めたまゝ
だまつて小膝を見つめてた。

乳飲んで

母に抱かれて乳飲んで
だまつて母の顔見たら
父のお顔も見たくつて
ちつくらたづねてやつたとき
母もだまつて泣きました。

顔見せ

芝居の顔見せおもしろく
だん〳〵ついて行つたなら
歸る路すぐ忘れはて
ひとりしく〳〵泣き出して
紅い灯のつらづいた
町をとぼ〳〵歩いたら
藁の草履をつつかけた
母がたづねてくれました。

敗けて

子供心は猶更に
褒めて貰ふが嬉しくて
女(なな)いぢめる子を見ては
助けてやらうと出は出たが
かへつて私が敗けちやつて
泣いてコソ〳〵歸りました。

東京見たさに

東京見たさにいちんにち
納屋の後に莚敷いて
小父(おぢ)から貰つた繪卷物
だまつて見てたら日が暮れた。

子供は飯(まま)も欲しかろと
母は麥飯たいたとて
僕を探して居たけれど
母の心は知らなんだ。

鬼ケ島

雨の降る日の樂しみは
お宮の中で芝居して
弱い子供が桃太郎に
なつては見たが鬼に敗け
『それはうそちや』と泣いたげな。

燒檸檬

みかんを燒いて食つてたら
肺病になると云はれたが
今では次郎も四郎も私も
みんな無事では居るけれど
敎えた人が死にました。

お盆來る頃

川に入るな盆が來た
河童のさかなになるからと
母は毎日云つたのに
どつかの子供は今日もまた
どう〳〵捕られて死にました。

五月節句

笹卷節句が來たと云ひ
幟なんかをたてゝゐる
他の父さん見る時は
子供心に悲しうて
母に抱かれて泣きました。

野火

ほかの子供が野火つけて
面白がつてゐたからに
私もつけて見ましたら
村の芝橋焼け落ちた。

かくれんぼ

ほんとに暗い夜でした
隠れごつこをしやうじやと
云はれてやつては見たものゝ
どれが鬼やら人じややら
怖い〳〵と思つたら
小便壺に落ちこつた。

萬歳樂

「春の初めのお祝に
御萬歳とやあなあ」
鼓の音のかなしさに
二人の男を見てゐたら
男はだまつて笑つてた。

小曲詩集
著者　啞の小鳥
印作

大正十一年十二月廿五日印刷
大正十二年一月二日發行

定價　金九拾錢

著作者　樋口翅影
發行者　山下貞標　山形縣酒田町鷹町十一番地
印刷所　黑澤活版所　山形縣酒田町近江町十四番地
印刷者　黑澤虎治郎

發行所　山形縣酒田町新片町　酒田紅葉會

正誤

△序文四頁二行目「のでかる」を「あ」とす、仝三行目碧い想瞑は「瞑想」。仝四行目―氏のためにも「又」以下五行目の「氏のためにも」まで廿一字除く。仝六頁二番の歌「くとり」は「ひ」の誤り

△本文「ひめゆり」の内君と別れての一行目「出で」を「出て」とす。表題「きむしめ」は「きむすめ」。煙りの六行目「かくし」はすの誤り。「月見草」の三行目「頬美んで」は「笑」とす

△仝「髪の亂」の内豆の畑二行目「聲」は「お聲」。仝六行目「少女」は『小女心』を加ふ。仝表題『新らすい筆』は（し）とす、

仝少女の戀の四行目（匿すとは）を（し）と訂正。

△（啞の小鳥）の中世の中への一行と三行目に（結）とあるは（詰）の誤り。

△猶愛讀者諸子も誤を發見したときは發行所まで御注意下されば幸甚です。

291
295

終